http://decfamily.p1.bindsite.jp/2013NEW/

We 25R

No.304　13/12/18

ユージン・スミスと水俣（続き）

（続き）

「そうしたら東京に出て洋裁の見習いをしていた従姉妹から東京に来ないかと葉書が来たの。母が学校もやれなかったから、行って勉強してきてよかよって。いまも忘れません、昭和二六年七月二五日、東京、行きました。従姉妹とも長いこと会ってないから、白い帽子に緑のリボンの目印をつけて、駅に降りたら動かないで待っておれって言われたですたい。そして、洋裁の見習いをするところに連れて行ってくださったの。既製服を作る小さな店で、旦那さんと奥さんと子供ひとり、従業員が五人いました。昼間はいっしょうけんめいやっているけど、夕方になると、田舎のこと思い出して、泣きよったですたい。悲しくて悲しくて。三年でどうにか一人前になったですたい」

恭子が東京にいる間にトヨ子は亡くなった。両親は、後になって手紙で知らせてきたという。恭子はトヨ子の葬式に出席することが出来なかった。

ユージンたちが借りた家には、溝口家の仏壇があり、トヨ子の遺影が飾られていた。利発そうなおかっぱ頭の少女だ。

「きょうだいのなかで一番かわいかったの。目が大きくてくりっとして、鼻筋がすーっとしてね。うちのじいちゃんも、きれか、よか子じゃって。性格もおとなしかった」

遺影のもとになった写真を見せてもらった。昭和二九年四月二〇日の撮影とある。溝口トヨ子七才、溝口順子四才。妹の手を握って、よそいきのワンピースを着たトヨ子は、引き延ばした遺影の写真よりはっきりと、整った顔立ちが見て取れた。つかの間、元気になって、学校に行けるようになったことがうれしかったという。すっくと立つその姿に病気の影はない。

なのに、二年足らずの後、この写真が遺影になってしまったのである。

＊

ユージン・スミスの代表作は「楽園の歩み」である。太平洋戦争中、記者として撮影のため赴いた沖縄で砲弾を浴び、生死を彷徨うほどの傷を受ける。その手術の後に撮影されたのがこの作品である。もう二度とカメラを握れないかも知れないという絶望の淵で彼が見たものは、小さなわが子が光の中へと進んでいくうしろ姿だった…。

この写真は発表直後から戦争で傷ついた多くの人々を勇気づけ、ユージン・スミスは一躍世界にその名を広めた。同じように、彼の水俣での写真は、生きることの意味を問いかけながら、見る者に対して生きる勇気を喚起し続けているのである。